

至りさかん也、略○中

宮戸川 關東には鯰なきよし、古來よりいひつたへたりしが、享保七八の比より淺草川に多し、上方の鯰とはかたち異なれども、大方は似たり、略○中

深川 深川沖にて取る、名産也、略○中

金魚 所々にて賣、元和年中異邦より渡る、飼魚にて、江河になし、藻の中に子をなす、略○下

〔假名世説〕延寶二年、道久下人彦作が書ける國町の沙汰に云、木挽町山村が芝居にて、一心二河白道一心二河白道は、丹波國千安の地蔵の縁起なるよし、京都にて此佛をくわんじやうし、其名を同號す、土佐少掾上るりを根本ほじかとも是をまなぶ、堺町にて櫻姫に掃部を出だし、木挽町にて類之介を出だす、二代目とやらん、面白きよし、江地の尊卑是をそらぎまになし、あゆみ昔の櫻姫いかで及ばんや、をばこぶ、見ずなりなんも口をし、誰かれぐして行くべしなど、て遣じ、本より望心は深き最

上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずとて、よろこぶけしきになん見えたり、棧敷もそこそこ、終日の慰にとてさげ重、せいろうの色ことに艶なるに、鹽瀬まんぢうさ、棕、金龍山の千代がせしよね饅頭、淺草木の下おこし米は、木の下おこし米は、勢州山田の者、來りてこし、白山の彦左衛門がべらぼう焼て、べらぼう焼は、ふのやきにし、八町堀の松屋せんべい、日本橋第一番高砂屋がちりめんまんぢう、麴町の助三ふのやき、兩國橋のちんたう、ちんたうは、風味甚甘美なに宜とて、今専ら賞翫す、芝のさんぐわんあめ、大佛大師堂の源五兵衛餅、源五兵衛餅、おまんかたみにせしと殊の外、好物なり、武藏の名物とりと、のへさん敷に忍び入り、終日おく氣色も色もなきは、櫻姫となりし類之助を、露のゆかりの玉かづら、心にかけて思ひ染めつなるべし、

按、延寶の比の江戸の名物こゝに盡くせり、此頃いまだ兩國橋の幾代もち、金龍山の淺草餅、本郷笹屋のごまどうらん鎌倉がし豊島屋の大田樂市谷左内坂の粟焼などはなしと見えたり、今にのこれるは、麴町の助惣ふのやきばかりなり、洞房語園にふのやきの事みえしは、ふるき